燈籠

キなる鉢の寸法也、小キ鉢には七八寸九寸丸ク掘り、深サ六七寸程に掘申候、尤見合第一、また丸鉢には水溜角に掘申事も有、

〔千家茶事不白齋聞書〕石燈籠之事

一六角は利休、四角は古織（古田織部正）○名高きは大德寺に有り、利休ゟ細川三齋（江）遣ス、うづまさ是は一度被盗候處、何方（江）行テモ主にたゝり在、京中ノ道具屋買取、又うづまさ（江）上ル、北野頼政之寄進也、殊之外さびたるもの、兩面之口計り有り、半月などもなし、わらび堂　二月堂　三月堂　くわんこ寺　般若寺、何れも奈良、柚之木ノ下奈良、さびて面白もの也、

〔茶道筌蹄一〕庭之部

石燈籠（蓋　油蓋）　古寺古社にありしを用ゆ、其外名物あり、蓋は杉板に半月のすかし（但し八日月なり）障子は十文字明々、勝手にて兩樣を用ゆ、利休形、油蓋は了々齋好、彌助作赤（今是を用ゆ）

木燈籠（輪　油蓋）　利休形、障子と三日月とむかひ、滿月と半月と向ふ、油蓋を居る輪は竹なり、仙叟好は滿月が角になるなり（尤仙叟好、滿月と障子と對すあれども、表流には不ル用、）

金燈籠　利休形、菊のすかし、鎧くづしの二ッなり、其餘は古寺古社にてふるびたるを用ゆ、今千家の利休堂にあり、

燈籠臺　利休形、栗のナグリ木の蜘手、高サ一尺八寸、江岑好の石の臺あり、一尺六寸也、蜘手寸法二寸、高キは蜘手燈籠の底へ十文字入るゝが故に、江岑好石臺同樣に成る也、○略

〔南方錄二〕燈籠附石燈籠木燈籠弦月すかし

露地の趣に隨ひ、手水鉢の邊、又は木陰の闇き所に置べし、石燈籠の古びたるよし、木燈籠は利休燈籠といへり、手水鉢の邊につり、又は蜘手をしてすべてよし、又三日月のも有り、

〔貞要集四〕石燈籠之事